

生徒のエンゲージメントを高める

～心理的安全性に基づく4技能5領域の育成～

1. はじめに：教材選定の経緯と課題意識

大学附属校の特性を活かし、受験対策に偏重しない英語運用能力の養成を目標としている。しかし、中高一貫教育に適した教材の選択肢が限られるという課題に対し、以下の選定基準を満たすとして、『Infinity』を採用した。

- 1. 文法一貫性：既存の文法教材である“Target Grammar”との学習内容に齟齬がない。
- 2. 読解量確保：検定教科書の弱点であった、十分な読解練習量を確保できる。
- 3. 教科書準拠の利便性：視認性や補助教材の多さなど、教科書の特徴を兼ね備えている。

1.1 英語に対する心情

小学校での英語教科化を経て、生徒の中学入学時における英語への印象は「ネガティブな感情の多さ」を伴う二極化の傾向にある（ベネッセ学力推移調査 2025 より）。「よーいドン」の段階でネガティブな印象を持つ生徒に対し、英語学習をポジティブな体験に変え、主体的な学習態度を育成することを目標に、ここ数年は取り組んでいる。

① 印象

●Q045.英語に関する印象	今回(%)	全国(%)
授業はわかっていて不安はない	18.3	23.3
授業はわかっているが、少し不安	36.5	43.1
不明点は少しあるが、不安はない	0.9	2.8
少しわからないところがあり、不安	33.9	23.9
授業についていけず、非常に不安	9.6	6.4

② 授業の理解や課題

●Q037.英語／学校・塾での課題の取り組み	今回(%)	全国(%)
必ず取り組みすべて理解できた	29.6	32.9
必ず取り組むが理解できないところがあった	27.8	27.0
わかるところしかやらなかった	8.7	7.2
ほとんどやらなかった	4.3	3.1
その他	28.7	28.4

2. 「安心感」と「エンゲージメント」の構築

モチベーション向上には、「自己決定理論（Ryan & Deci, 2017）」が提唱する以下の要素が不可欠である。

- ① 有能性（Competence）：「できる」という感覚。
- ② 関係性（Relatedness）：クラスメートや教師との良好な関係。
- ③ 自律性（Autonomy）：自分で選び、決定できる感覚。

さらに近年では、主体的・能動的な行動や関与に焦点を当てた「エンゲージメント」の重要性が指摘されている（Mercer & Dörnyei, 2020）。これら①～③を高めるための土台として、「安心感のある授業」の構築を実践している。

3. 授業設計

「安心感」を担保し、生徒のエンゲージメントを最大化するために、以下の仕組みを取り入れた。

3.1 授業構成のテンプレート化

授業の構成を一定にし、次の活動への見通しを立てやすくすることで、「できるかも」という意欲を刺激する（胡子, 2016）。

授業フェーズ	目的	主な活動
文法・文型理解	文法事項の演繹的な導入と定着	帯学習、演繹的導入、演習問題等
教科書理解・活用	既習事項の復習と4技能統合活動	帯活動、既習文法復習、リスニング先行の本文活用、音読等

3.2 とある日の授業（『Infinity』の教科書ベース）

	活動内容	狙い・効果
0. 授業環境	コの字座席	全員が互いの顔を見る（＝関係性の構築を促進）
1. 授業開始前	発声練習、Number Counting	「英語マインド」への切り替え。ペアワークとハイタッチを通じて関係性を構築
2. 聞く姿勢	Student-teacher（個人プレゼン）	プレゼンターへの配慮を促し（聞き手 80% の責任）、相互尊重の文化を醸成
3. 知識の定着	すらすら英会話（復習を兼ねる）	習得した知識を自己文脈に活かす機会（自律性）
4. 教科書活動	リスニング先行、ハンドアウト、ペアでの答え確認	「聞く」活動から入り、3～4 回のリスニングで概略を把握。個人での取り組み後、教え合いを通じて理解を深める（ZPD、関係性、有能性）
5. 発音練習	スピーキングに繋げるための多様な発音練習（ペアワーク多用）	たくさんの練習機会により、自信につなげる
6. 表現活動	Whispering Writing	五感をフル活用し、「書く」学習の促進・定着を図る
7. 評価/報酬	活動の頑張りに応じて、ステッカーをあげる	苦手意識を持つ生徒にとって英語学習への「外発的動機付け」となる（努力の見える化）
各活動の流れ	個 → ペア → 全体 → 個	まず「個」の時間を確保し、その後ペアでの教え合いで理解を促す（ZPD）。有能性、自発的な挙手を促す

4. その他の工夫（Infinity の題材を利用して）

4.1 授業参観でのポジティブ体験

- 家族紹介プレゼン：授業参観で家族紹介プレゼンを実施（グループ内発表）。
→ Lesson1 や 2 では、「自己紹介」や「My hero」が題材として扱われており、その一部（単語）を入れ替えることで、立派な自己文脈を活かした発表（本当の自己紹介や他己紹介）につなげられる。
- 全員参加型：保護者にも授業内容や机間巡視を体験してもらい、「全員」で授業を創り上げる。

- 効果: クラスメート、自分の保護者、および第三者（他の保護者）からの肯定的フィードバックを得ることで、英語へのポジティブな感情を創発。

4.2 評価基準の明確化と努力の可視化

- テスト出題内容の明示: 試験範囲における出題内容と配点を明確に提示。

目的 勉強への戦略を立てやすくし、学習動機を刺激する（瀧沢, 2014）。

- 努力の可視化: 定期テストごとに「自学ノートの基準ページ」を設定し、平常点として評価。

目的 自学ノートの取り組みを「努力の可視化」として評価し、継続的な学習習慣を奨励（上山, 2011）。
→本文（例文）テストの結果だけを評価する（総括的評価）のではなく、その過程も評価（形的评价）することで、学習者としての主体性（Autonomy）を育成する。

5. まとめ

『Infinity』の採用と「安心感」を重視した授業テンプレート化を組み合わせた「エンゲージメントを高める」授業実践は、以下にまとめられる。

1. 心理的負担の軽減: 『Infinity』の Starter や My dictionary といった教材が、「会話」「発音」「直感的な単語理解」の3点で生徒の不安を軽減し、生徒の心理的負担を下げる。
2. 学習の効率化: 教科書と文法問題集がシームレスに連携しているため、非効率的なストレスが少なく、学習に取り組める。
3. 自己文脈の活用: 教科書の内容を少しアレンジするだけで「自己文脈を活かす活動」に移行でき、生徒がゼロから英文を考えるハードルを大幅に下げる。
4. 見通しの確保: 授業構成がテンプレート化されたことで、生徒は授業に安心感を持って臨むことができ、活動への積極性を向上させる。
5. 関係性の深化: ペアワークを多用することで、ミスを恐れない雰囲気づくりと深い関係性を構築。



プロフィール



みやけ ゆうき

三宅 裕紀 先生（関西大学北陽中学高等学校）

教員歴 13 年目。大阪教育大天王寺高校、サレジオ学院中高などを経て、現任校 2 年目。University of Warwick で MA TESOL を修了（専門は「英語教育における動機づけ」）。今後は、LEGO® SERIOUS PLAY®等を使い、「英語」と「思い」をつなげる授業を検討中。

参考文献

胡子美由紀（2011） 英語授業ルール&活動アイデア 35 明治図書出版

胡子美由紀（2016） 英語で行う英語授業のルール&活動アイデア 明治図書出版

上山晋平（2011） 英語 家庭学習指導ガイドブック 明治図書出版

Mercer, S., & Dörnyei, Z. (2020). *Engaging Language Learners in Contemporary Classroom*. Cambridge University Press.

Ryan, R. M., & Deci, E. L. (2017). *Self-determination theory: Basic psychological needs in motivation, development, and wellness*. Guilford Publications.

田尻悟郎 田尻悟郎の website workshop

https://sc.benesse-gtec.com/tajiri/consult/answer02_03.html (2025.9.26 アクセス)

瀧沢広人（2014） 作問の鉄則・良問の条件 明治図書出版

Ushioda, E. (2009). A Person-in-Context Relational View of Emergent Motivation, Self and Identity. In Z. Dörnyei & E. Ushioda (Eds.), *Motivation, language identity and the L2 self* (pp. 215-228). Multilingual Matters.